

中英語頭韻詩Pearl, line 446について

Tajima Matsuji
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1329296>

出版情報：英語英文学論叢. 56, pp.1-11, 2006. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

中英語頭韻詩 *Pearl*, line 446 について

田 島 松 二

I

古英語、中英語のテキストを、語句や語法にこだわりながら厳密に読むという訓詁の学的な作業を長年にわたって続けてきた。その間、先達の研究から蒙った恩恵ははかり知れない。その一方で、己の力不足とは関係なく、欧米の専門家の説明や解釈に疑問を覚える箇所にもしばしば遭遇した。日本人だからこそ気になるところも少なくなかったように思う。そのような箇所に関する筆者なりの考えを、近年、研究ノートとして幾つか発表してきた(Tajima 2000, 田島 2003, 2006)。小論もそのような試みの一つである。

今回取り上げるテキストは、14 世紀後半の北西中部 (North-West Midland) 方言で書かれた頭韻詩 *Pearl* (『真珠』) である。*Cleanness*, *Patience*, *Sir Gawain and the Green Knight* とともに、同一筆蹟による 14 世紀末頃の写本 Cotton Nero A.x に収められている。これら 4 篇はガウェイン詩群 (the *Gawain-poems*) と称され、同一詩人の作とする説も有力である。当の *Pearl* は頭韻と脚韻を併用した複雑な詩的技巧で知られ、文学的評価も高い 1,212 行からなるエレジーである。刊本テキストも、19 世紀後半の Morris (1864) 以降、優に 20 を超えるし、現代語訳も 10 点を下らない。重要な作品であることの証左であろう。小論は、その 445-46 行、とりわけ 446 行目の後半に関する語法ノートである。

まず、問題の行を含む数行を *Pearl* の標準版テキストと目される Gordon (1953) から引用 (下線は筆者) する。詩人が夢の中で亡き娘 *Pearl* と霊魂の救いについて議論しているくんだり (241-976行) の一節である。

The court of þe kyndom of God alyue
Hat3 a property in hytself beyng:
Alle þat may þerinne aryue
Of alle þe reme is quen cþer kyng,

And neuer oper zet shcal de pryue,
 Bot vchon fayn of operez hafyng,
 And wolde her corounez wern worpe þo fyue,
 If possyble were her mendyng. (Pearl, 445-52)

(大意：生ける神の国の宮廷には／本来備わった特質があります／ここに
 来ることができるものはすべて／この国全体の女王か王なのです／それで
 いて他人の物を奪うことなどないのです／それどころかお互いに相手の持
 ち物を喜び合い／他人の冠が五倍も価値あるものであればよいと願うので
 す／もしもよりよくすることができるものなら)

ここで取り上げる冒頭の2行(445-6)に関する限り、諸テキスト間の異同
 は、綴り字を多少現代風にしたものは別として、*hytself*を一語として表記して
 いるか、*hyt self*と2語に表記しているか、という点だけである。以下、446行
 目後半の“in hytself beyng”に関して、1世紀以上にわたり、大方のテキスト
 で受け入れられてきた *hyt* あるいは *hytself* を所有格(属格)、後続の *beyng*
 を名詞とする解釈は果たして妥当か、という問題を考えてみたいと思う。

II

小論で検討した *Pearl* の刊本テキストは、明らかに学習者用と考えられるも
 のを含め、計22点である。そのうち、446行目に関して注釈等が一切見られ
 ないのは Moorman (1977) と成瀬 (1981) の2点のみである。残る20点で
 提示されている解釈、説明を見てみよう。

傍注、脚注、グロッサリー等から判断して、当該箇所解釈は2つに分かれ
 る。一つは、*hyt* あるいは *hytself* を人称代名詞 *hyt/hit* (= ‘it’) の所有格(属
 格)、後続の *beyng* を名詞と考える解釈である。*Pearl* の最初の刊本テキスト
 である Morris (1864, 1869²) では、当該箇所は“in hyt self beyng”となっ
 ている。つまり、*hyt* と *self* は2語として表記され、傍注(ただし、厳密な意
 味での傍注ではなくて、いわゆる plot summary) では ‘in its own being’、
 後注では ‘in its very being’ とパラフレーズされている。グロッサリーでは、
hyt は取り上げられていないが、446行目の *beyng* は名詞で、‘being, exist-
 ence’ という意味が与えられている。*self* には ‘very’ と ‘same’ の意味が付

されているが、特に 446 行への言及はない。要するに、Morris の解釈は、*hyt* は ‘its’ の意の所有格、*self* は ‘own, very’ の意の形容詞、*beyng* は ‘being, existence’ の意の名詞ということであろう。この 19 世紀中葉の解釈が、今日に至るまで大多数のテキストで踏襲されている。即ち、*hyt self* と分かち書きしたテキストの Osgood (1906), deFord (1967), Hillman (1961), Garbáty (1984), Vantuono (1984, 1987, 1995)、更に辞書の MED (s.v. *hit* pron.3. (a)) である。*hytself* のように 1 語に綴ったテキストの Haskell (1969), Dunn & Byrnes (1973, 1990²), Andrew & Waldron (1978, 1987, 1996), Turville-Petre (1982), Stanbury (2001) も、*hytself* を ‘its own’ あるいは ‘its very’ と解している。文法的説明を付したのも 2 点ある。*Pearl* の標準版テキストである Gordon (1953) はグロッサリーで、この *hytself* 自体を属格とし、‘its own’ という意味を与え、*beyng* は ‘nature’ の意の名詞としている。最新の Burrow & Turville-Petre (2005) も脚注で、*hytself* をわざわざ属格と注記し、*hytself being* を ‘its own nature’ と訳している。つまり、分かち書きされた *hyt self* であれ、一語で綴られた *hytself* であれ、*hyt* の所有格(属格)という解釈である。(現代語訳は、意識的な表現が多く判別しにくいものもあるが、直訳的なものはほぼ上記の解釈に従っている。)

もう一つの解釈は、*hytself* を再帰代名詞、*beyng* を現在分詞と考える立場である。しかし、この解釈は小数派で、実質的には 3 種類のテキストにしか見られない。まず、Sisam (1921) に付された、かの J. R. R. Tolkien のグロッサリー (s.vv. *Ben* & *Hit*) が、問題の *beyng* を現在分詞、*hytself* を ‘itself’ の意の再帰代名詞と解し、この *in hytself beyng* 全体に ‘inherent’ という訳語を与えている。また、Everyman’s Library の Cawley (1962)、その増補版 Cawley & Anderson (1976)、更にはその改訂新版の Anderson (1996) は、問題の箇所を一貫して ‘inherent in itself’ と解している。(もっとも、この解釈は、脚注で 446 行目を ‘Has a special virture inherent in itself’ と訳した最初の編者 Cawley (1962 & 1976) の見解と考えるべきであろう。) 文法的説明こそ付されていないが、上記 Sisam = Tolkien (1921) と同じ解釈である。なお、Gollancz (1921) は *hytself* を *hyt* と *self* の 2 語に表記しながら、この 445-46 行を ‘The court of the Kingdom of Living God hath in itself this property’ と訳している。これも同じ解釈と見てよい。

以上のように、従来の解釈では、446 行目の *hyt* あるいは *hytself* を代名詞の所有格(属格)、後続の *beyng* を名詞と考える立場が、*hytself* を再帰代名詞、

beyng を現在分詞と考える立場より遙かに優勢である。実際のところ、どちらの解釈でも、文意自体は大して変わらない。とはいえ、前者の解釈には、語法的に見て、やや無理があるのではないかというのが筆者の考えである。以下で、そのあたりのことを考えてみたい。

III

今日、*self* との複合形をとる再帰代名詞は *myself*, *himself*, *itself* のように 1 語で表記するのが一般的である。*self* はもともと (代) 名詞を強めるために、同格的にあとにつけて使われた別語である。中英語では、写本では 2 語になっていても、刊本テキストでは 1 語で表記するケースが多いようである。従って、*Pearl* の刊本テキストでも、*hyt self* のように 2 語に表記したテキストと、*hytself* と 1 語で表記したテキストがあることは前節で見たとおりである。

Cotton Nero 写本のファクシミリ版を見ると、*hyt* と *self* との間には確かに間隔が置かれている。(他の再帰代名詞の場合も同様である。) *Pearl* の最初の編者 Morris (1864, 1869²) は、写本の “*hyt self*” を、*hytself* と 1 語ではなく、写本に忠実に *hyt self* と 2 語で表記し、その上で、*hyt* を ‘its’ の意の所有格、*self* を ‘own, very’ の意の形容詞、*beyng* を ‘being, existence’ の意の名詞と解したのである。先述したように、このほぼ 1 世紀半も前の解釈が今日に至るまで、ほとんどすべての刊本テキストで踏襲されている。2 語に分ち書きされていない *hytself* という再帰形をそのまま所有格 (属格) と考える解釈も、Morris の流れを汲むものと考えてよいであろう。辞書類では、MED (s. v. *hit* pron. 3.(a)) が所有格の *hit* (= ‘its’) の項で、特に *hit self being* という表現を取り上げ、‘its own being or nature’ という訳語を付している。しかし、その引用例はこの *Pearl* 446 のみである。OED (s. v. *Itself*, pron. 4) に唯一引用されている *itself* の所有格の例は明らかに誤読によるものである。¹⁾ 筆者が知る限り、*hit self/hitself* を *hit* の所有格と解せる例はほ

¹⁾ OED (s. v. *Itself*, pron. 4.) が挙げる例は次のものである。

a1300 *Cursor M.* (Gött.) 9466 So hy na thing was neuer wroght, þat thoru it seluen miss ne moght Fall dun into lauer state.

この例は、MED (s. v. *hit-self* pron. 1.(d)) では、*hit-self* が前置詞の目的語の例として引用されている。

かにどこにも記録されていない。*Pearl* 446 の例は文字通り ‘hapax legomenon’ である。もっとも、(*h*)*it* 自体に所有格用法がないわけではない。

中英語では、3 人称単数中性の人称代名詞 *hit/hyt/it* の所有格は男性形と同じ *his* である。しかし、*hit/hyt/it* をそのまま所有格として用いる用法もあり、ガウェイン詩群に初出する。²⁾ *Pearl* にも所有格の *hit* (= ‘its’) が 3 例見られる。そのうちの 1 例は次の例である。

I wan to a water by schore þat scherez—
Lorde, dere wat3 hit adubbement! (*Pearl* 107-8)

(私は岸边沿いに曲がりくねって流れる川に辿りついた／ほんとに その川を飾っているものは見事であった)

所有格の *hit* (= ‘its’) は、*Pearl* の 3 例以外にも、同じガウェイン詩群の *Cleanness* に 7 例、*Patience* に 2 例見られる。³⁾ しかし、そのような *hit* が形容詞の *self* と共起して名詞を修飾する例は見られない。いずれも上例のように、いかなる形容詞も介在することなく、名詞を直接修飾する例ばかりである。

一方、人称代名詞 *hit/hyt* と共起する *self/seluen* は、ガウェイン詩群全体で次の 3 例のみである。

Pearl 446: Hat3 a property in hytself beyng;
(本来備わった特質があります)

Cleanness 281: When he knew vche contre corrupte in hitseluen,
(神はどの国も内部が墮落してしまったのを知ったとき)

Gawain 1847: For hit is symple in hitself? And so hit wel semez.
(それがつまらないものだからでしょうか? 本当にそう思われますわ)

Pearl の例はさておき、他の 2 例は、間違いなく、通常の ‘itself’ の意の再帰代名詞である。(この 2 例とも、写本では “hyt seluen”, “hyt self” とそれぞれ

²⁾ Gordon 1953, p. 110; Mustanoja 1960, pp. 157-58; MED, s.v. *hit* pron.3. (a) 等参照。

³⁾ Tajima 1978, p. 196 参照。

れ2語に分ち書きされている。)同様に、*Pearl* の例も通常の再帰代名詞と考えることに不都合はないように思われるが、先に見たように歴代の編者たちは所有格(属格)と考えている。

次に、*self* の用法の点から考えてみよう。*self*, *seluen* が人称代名詞の所有格と共起する例は、問題の *hytself* (*Pearl* 446) を別にすれば、*myself*/*myseluen*, *þyseluf*/*þyseluen* のみである。ガウェイン詩群全体でも、それが名詞を修飾する例は1例もない。つまり、人称代名詞の所有格が *self*, *seluen* という形容詞と共起して名詞を修飾する例は、*Pearl* はもちろん、ガウェイン詩群の他の作品にも全く見られない。名詞を修飾する *self* はすべて次に示すように、単独で、あるいは冠詞か指示詞を伴って、‘same, very’ の意を表す純然たる形容詞である。

Pearl: 203 of self sute ‘of the same colour’; 1076 þe self sunne ‘the sun itself’; 1046 þe self God ‘God himself’.

Cleannes: 660 þat selue Sare ‘That same Sarah’; 1418 bifore þe self lorde ‘in front of the lord himself’; 1769 at the self tyme ‘at the very time’.

Gawain: 751 þat self nyzt ‘that very night’; 2147 þe self chapel ‘the very chapel’

このように見てくると、Morris (1864) や Morris 以降の多くの編者、更には MED のように、*Pearl* 446 の *hyt* を所有格(属格)、*self* を形容詞と解する考え方、あるいは、Gordon (1953) や最近の Andrew & Waldron (1978, 1987, 1996), Burrow & Turville-Petre (2005) のように、*hytself* そのものを所有格(属格)と解する考え方は、*Pearl* 446 に限られた、極めて例外的な解釈であると言わねばならない。理論的にはあり得るとしても、実際には、ほかに用例上の裏付けもない。とすれば、そのような無理な解釈に与するよりも、ここはむしろ、*hit self*/*hitself* を、中英語でも一般的な ‘itself’ の意の再帰代名詞ととる方が自然ではなからうか。

hytself を通常の再帰代名詞と見なすことにより、当該箇所に関する語法も無理なく説明できる。つまり、abababab という脚韻形式を満たすためには、446 行目の行末に *-yng* 形をもってくる必要がある (446 *beyng*, 448 *kyng*, 450 *hafyng*, 452 *mendyng*)。そのために、“*beyng* in *hytself*” の *beyng* が後置さ

れて、“in hytself beyng”という語順になったのではないか。そのように考えれば、この *beyng* は先行する *property* を修飾する現在分詞ということになる。Sisam = Tolkien (1921), Cawley = Anderson (1962, 1976, 1996) も、脚韻のことにはふれていないが、同じように考えたのではなかろうか。この解釈でひとつ気になる点は、北西中部方言で書かれたガウェイン詩群の現在分詞語尾は、*-ande* 語尾が規則的であり、*-yng* 語尾はまだ一般化していなかったことである。しかし、その *-yng* 語尾が、*Pearl* に1例 (1175 *sykyng*)、*Gawain* に2例 (753 *sykyng*, 2126 *gruchyng*) 見られる。⁴⁾ 小数とはいえ、同一作品(群)に見られることは、*Pearl* 446 の *beyng* を現在分詞と解せる傍証になる。

筆者の考えが妥当であるとすれば、この 446 行目の解釈は、直訳すれば、‘... has a property being in itself’ (それ自身に内在する特質がある)、Cawley (1962) を借用すれば、‘... has a special virtue inherent in itself’ (本来備わった特質がある) というものである。

IV

以上、中世英文学の珠玉とも評される *Pearl* を取り上げ、446 行目後半の “in hytself beyng” に関して、今日最も広く行われている “in its own being or nature” という解釈の妥当性を、語法的な観点から再検討した。

筆者の結論は、*hyt* を無屈折の所有格、*self* を形容詞、*beyng* を名詞と解する Morris (1864) を始めとする多数派の解釈、その延長線上にある *hytself* という再帰形そのものを所有格、*beyng* を名詞と解する Gordon (1953) や Burrow & Turville-Petre (2005) らの解釈には統語法上無理があるのではないかというものである。文意に大差はないとはいえ、中英語でも用例上の裏付けが全くない解釈に従うよりも、Sisam = Tolkien (1921) や Cawley = Anderson (1962, 1976, 1996) ら少数派にならって、*hytself* を通常の再帰代名詞、*beyng* を脚韻の要請により後置された現在分詞と考えるべきではないか。その方が統語法上も無理のない解釈ができるのではないか、ということである。

⁴⁾ ガウェイン詩群全体では、現在分詞語尾は、*-ande* 157例、*-and* 1例、*-ende* 1例、*-yng* は *Pearl* 446 の例を含めて4例という分布を示している (cf. Tajima 1970, p. 51)。

参 考 文 献

Manuscript:

Pearl, Cleanness, Patience and Sir Gawain, reproduced in facsimile from the unique MS. Cotton Nero A.x in the British Museum, with Introduction by I. Gollancz. EETS OS 162. London: Oxford University Press, 1923.

Editions:

- Anderson, J. J., ed. 1996. *Sir Gawain and the Green Knight, Pearl, Cleanness, Patience*. London: Dent.
- Andrew, M. and R. Waldron, eds. 1978, 1987, 1996. *The Poems of the Pearl Manuscript*. London: Edward Arnold; rev. ed., Exeter: University of Exeter Press.
- Burrow, J. A. and T. Turville-Petre, eds. 2005. *A Book of Middle English*. 3rd ed. Oxford: Blackwell. [Pp. 203-220]
- Cawley, A. C., ed. 1962. 'Pearl' and 'Sir Gawain and the Green Knight'. London: Dent.
- Cawley, A. C. and J. J. Anderson, eds. 1976. *Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight*. London: Dent.
- deFord, S., ed. and tr. 1967. *The Pearl*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Dunn, C. W. and E. T. Byrnes, eds. 1973, 1990². *Middle English Literature*. New York: Harcourt Brace Javanovich; rev. ed., New York: Garland. [Pp. 339-75]
- Garbáty, T. J., ed. 1984. *Medieval English Literature*. Lexington, MA: D. C. Heath. [Pp. 722-53]
- Gollancz, I., ed. and tr. 1921. *Pearl: An English Poem of the XIVth Century*. London: Chatto and Windus.
- Gordon, E. V., ed. 1953. *Pearl*. Oxford: Clarendon Press.
- Haskell, A. S., ed. 1969. *A Middle English Anthology*. Garden City, NY: Doubleday. [Pp. 278-341]

- Hillman, Sr. M. V., ed. and tr. 1961. *'The Pearl': Medieval Text with a Literal Translation and Interpretation*. Convent Station, NJ: College of Saint Elizabeth Press; paperback ed., Notre Dame, IN and London: University of Notre Dame Press, 1967.
- Moorman, C., ed. 1977. *The Works of the 'Gawain'-Poet*. Jackson: University Press of Mississippi.
- Morris, R., ed. 1864, 1869². *Early English Alliterative Poems in the West-Midland Dialect of the Fourteenth Century*. EETS OS 1. London: Oxford University Press.
- Osgood, C. G., ed. 1906. *'The Pearl': A Middle English Poem*. Boston: Heath.
- Sisam, K., ed. 1921. *Fourteenth Century Verse and Prose*. Oxford: Clarendon. [Corrected eds., 1937, 1955]
- Stanbury, S., ed. 2001. *Pearl*. Kalamazoo, MI: Medieval Institute Publications, Western Michigan University.
- Turville-Petre, T., ed. 1982. *Medieval Literature: Chaucer and the Alliterative Tradition*. Vol. 1, Part One. Rev. ed., ed. by Boris Ford. Harmondsworth: Penguin. [Pp. 473-523 and 601]
- Vantuono, W., ed. and tr. 1984. *The Pearl Poems: An Omnibus Edition. Vol. 1: 'Pearl' and 'Cleanness'*. New York: Garland.
- Vantuono, W., ed. and tr. 1987. *The Pearl Poem in Middle and Modern English*. Lanham, MD: University Press of America.
- Vantuono, W., ed. and tr. 1995. *Pearl: An Edition with Verse Translation*. Notre Dame, IN and London: University of Notre Dame Press.

成瀬正幾. 1981. 『中世英詩「真珠」の研究』(神戸商科大学研究叢書 XIX) 神戸: 神戸商科大学学術研究会. [Pp. 1-122]

Translations:

- Borroff, M., tr. 1977. *Pearl: A New Verse Translation*. New York: Norton.
- Chase, S. P., tr. 1932. *The Pearl: The Fourteenth Century English Poem*. Rendered in Modern Verse. New York: Oxford University

Press.

- Coulton, G. G., tr. 1907. *Pearl: A Fourteenth-Century Poem, rendered into Modern English*. 2nd ed. London: Nutt. (1st ed., 1906.)
- Eller, V., tr. 1983. *Pearl of Christian Counsel for the Brokenhearted*. Washington, DC: University Press of America.
- Finch, C., tr. 1993. *The Complete Works of the 'Pearl' Poet*. Berkeley: University of California Press.
- Gardner, J., tr. 1965. *The Complete Works of the 'Gawain'-Poet*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Gollancz, I., tr. 1918. *Pearl: An English Poem of the Fourteenth Century*. London: Jones.
- Jewett, S., tr. 1908. *The Pearl: A Modern Version in the Metre of the Original*. New York: Crowell.
- Stone, B. tr. 1964. *Medieval English Verse*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Tolkien, J. R. R., tr. 1975. *Sir Gawain and the Green Knight, Pearl, and Sir Orfeo*. London: Allen and Unwin.
- Weston, J. L., tr. 1912. *Romance, Vision and Satire: English Alliterative Poems of the Fourteenth Century*. Boston and New York: Houghton Mifflin.
- Williams, M., tr. 1967. *The 'Pearl'-Poet: His Complete Works*. New York: Random House.

Dictionaries and Studies:

- MED = H. Kurath, S. M. Kuhn and R. E. Lewis, eds. 1952-2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.
- Mustanoja, T. F. 1960. *A Middle English Syntax. Part I*. Helsinki: Soci t  N ophilologique.
- OED = J. A. H. Murray, et al., eds. 1933. *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- Tajima, M. 1970. "On the Use of the Participle in the Works of the *Gawain*-poet" 『文芸と思想』(福岡女子大学) 34, 49-70.

- . 1978. “Additional Syntactical Evidence against the Common Authorship of MS. Cotton Nero A.x”. *English Studies* (Amsterdam) 59, 193-98.
- . 2000. “*Piers Plowman* B V 379: A Syntactic Note”. *Notes and Queries* (Oxford) 245 (n.s. 47), 18-20.
- 田島松二. 2003. 「OE, ME テキストにおけるトリヴィア研究の勧め」 *The Kyushu Review* 8, 103-107.
- . 2006. 「*The Canterbury Tales: General Prologue*, 521 をめぐって」 田島松二編『ことばの楽しみ—東西の文化を越えて』(南雲堂), pp. 103-12.